



# M I G A コラム

## 「世界診断」

2017年3月10日

### トランプ旋風に想うこと

鎌江 伊三夫

明治大学研究・知財戦略機構 客員研究員



東京大学公共政策大学院特任教授、  
医療技術評価・政策学講座を担当。  
明治大学国際総合研究所研究主幹（医療政策）、  
キャノングローバル戦略研究所研究主幹。

京都大学工学部・院修士（情報工学）  
卒、神戸大学医学部卒（医師）、  
ハーバード公衆衛生大学院修士・博士  
卒（医療意思決定科学の博士号取得の  
初の日本人）。

国際医療経済学・アウトカム研究学会  
（ISPOR）理事、ISPOR 日本部会初  
代会長を歴任し国際派として活動中。

いま、トランプ旋風が吹き荒れている。選挙戦での公約でおおかた予想されていたとはいえ、本年1月の米国大統領就任直後、まさかの大統領令乱発である。「中東やアフリカの特定の国からの入国禁止」、「シリア難民の受け入れ禁止」、「メキシコとの国境の壁の建設」、「TPPへの参加の取りやめ」、「オバマケアの見直し」など正気の沙汰とも思えない。米国世論の分断は深刻さを増し、国際的にも大きな波紋を起こしているのは周知のとおりである。

そのようなトランプ新大統領の言動に対して、皆保険のない米国でその樹立を悲願としてきたオバマ前大統領はもとより、ドイツのメルケル首相やフランスのオランド大統領など、これまでの伝統的な欧州のリーダー達もそろって非難の声明を出し、警戒の色をかくさない。英国のEU離脱決定に加え、これまでの国際政治の常識を逸脱した米国の新大統領の登場は、まさに「これまでの世界」の終わりを感じさせる。

トランプという言葉は、日本語ではカードゲームを意味するが、英語の trump には「切り札」の意味がある。まさに「切り札」大統領なのである。しかし、米国第一主義を唱えるトランプ大統領の登場は、果たして国際政治のパワーゲームの切り札になるのであろうか。

冷戦終了後、パックスアメリカナ（アメリカによる平和）と言われて久しい。しかし、昨今の世界情勢に見るパックスアメリカナの破綻は誰の目にも明らかである。中東の不安定化、特にイスラム国の脅威や、中国の軍事力増強とその強硬な海洋進出、北朝鮮の核ミサイル開発と暴発の脅威など。ローマ帝国の歴史を見れば、パックスロマーナ（ローマによる平和）も永続しなかったように、現在

のバックスアメリカーナが終焉に向かう歴史の歯車を、果たして一人の大統領が逆転できるのであるか。確かに、米国第一主義は一時的に米国の繁栄を取り戻すかもしれないが、その囲い込みの発想の背景にある保護主義は、やがて中・長期的には米国の衰退として自らに跳ね返ってくる懸念がある。バックスアメリカーナ終焉を加速した「切り札」大統領になるとすれば、彼の名前はあまりに歴史の皮肉となるに違いない。

筆者には病院の現場で患者さんを診察してきた経験が少しある。そのため、メディア報道で知るトランプ大統領の言動を医学的な視点から眺めると興味深いと感じている。いくつかのキーワードが想起される。その第一はソマタイゼーション (somatization; 身体化) である。医学的理由が十分見当たらないのに、特定の身体上の異常を自覚することを数か月以上にわたって訴える患者さんはソマタイザーと呼ばれる。通常、一般内科を訪れる患者さんの7割ほどはソマタイザーであるとの米国の病院からの報告もある。

このソマタイザーには2つのタイプがあるといわれる。一つは、医学的・身体的原因は確かにあるのだけでも痛みや感覚異常などを過大に感知して病因があると誤解するタイプ。もう一つは、医学的・身体的原因はないが、身体的な症状を訴えることで医師とのコミュニケーションを求めるタイプである。前者は当然、治療（例えば、誤解を解くために原因を説明して、必要に応じて心理療法や薬物投与）による治癒 (cure) が求められるが、後者は治癒よりケア (care) が必要である。すなわち、医師は治そうとするのではなく、患者の話に耳を傾け、話し相手になることが大切とされる。トランプ大統領が選挙戦以来、繰り返し訴えてきた米国や世界の現状への不満を、彼なりのソマタイゼーションと見なせばどうであろうか。特に、後者のタイプの傾向が強いとしたら、ケアが必要となる。他国の政治家がむきになって論理的な反論（治癒）を行おうとするのは無効である。むしろ、安倍首相のとったゴルフ対応は、ケアの一種として有効であったのかもしれない。

第2のキーワードは「タイプA人間」である。タイプAと呼ばれる人の特徴は敵意性にあると言われる。タイプAの「A」はアグレッシブ (Aggressive; 攻撃的) あるいは、アクティブ (Active; 活動的) の頭文字を意味し、血液型のAとは無関係である。タイプAは、気性が激しい、いわゆる「イライラ人間」であり、仕事に対する責任感が強いあまり、私生活を犠牲にすることもいとわず、それに生きがいを感じるような人である。

確かにトランプ大統領の言動には特定のグループや国への偏見や敵意があるのではないかと疑われるし、“You are fired! (首だ)”が常套句といわれるトップビジネスマンとしての彼のキャリアには、いかにもタイプA的な響きがある。もっとも、そのようなタイプAとおぼしき人はそれほど珍しいわけではなく、日常、どの職場でもよく見かけるかもしれない。医学的には、このタイプAの患者さんは循環器系疾患のリスクが高いことで知られている。特に、高血圧、狭心症や心筋梗塞などのハイリスク要因と言われる。心理面では他人の善意を信用できないため、躁鬱状態や対人関係でのトラブルが起こりやすいと言われる。従って、医学的には治療が必要となる場合もある。

タイプAは、他者との信頼関係が乳幼児期に何らかの形で障害を受けたために生じるのではないかとの説もあるが、その点で想起される第3のキーワードが「アダルトチルドレン」である。この言葉は、クリントン米国元大統領が女性誌『グッド・ハウスキーピング』のインタビューで、自らアダルトチルドレンであることを告白したことで一般に知られるようになった。とかく「大人になりきれていない子供のような人」と同義であるように思われがちである。しかし、アルコール依存症の親な

どからの虐待といった問題家庭で育ったために、大人になってもその体験が心理的外傷(トラウマ)として残り、人間関係に障害をきたすという点で、単なる「未成熟な大人」とは異なっている。

トランプ大統領に問題家庭とそのトラウマがあるのかは不明であるため、自らの告白がない限り安易な論評は避けるべきであろう。ただ、アダルトチルドレンには、心理カウンセラーや医師が問題解決の方法を論理的に示してもあまり効果はなく、問題解決できるのは本人の納得だけであり、カウンセラーの説く論理性とのギャップや対立を生じやすい点に注意が必要である。トランプ大統領は就任以来、CNN やニューヨーク・タイムズを偽のニュースと呼んで批判を深めている。仮に CNN やニューヨーク・タイムズを論理的カウンセラーと見なせば、いかにもアダルトチルドレン的な対立の構図が見えてくるのではないだろうか。

さらに想起されるキーワードは「自己愛性パーソナリティー障害」である。2017年2月20日のNHKニュースは「障害者殺傷事件 元職員は「自己愛性パーソナリティー障害」か」というタイトルで、相模原市の知的障害者施設殺傷事件について報じている。メディアにもこのような精神科領域の専門用語が流れ、自己愛性パーソナリティー障害という言葉が次第に知られるようになってきた。ただし、自己愛性パーソナリティー障害が必ずしも暴力と結びつくわけではない。

DSM-IV-TR という国際的な診断基準によれば、自己愛性パーソナリティー障害は誇大性(空想または行動における)、賞賛されたいという欲望、共感の欠如の広域な様式で、成人期早期までに始まり、種々の状況で明らかになるとされ、以下のうち5つ(またはそれ以上)によって示されるとされる。すなわち、

1. 自己の重要性に関する誇大な感覚。
2. 限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。
3. 自分が”特別”であり、独特であり、他の特別なまたは地位の高い人たちにしか理解されない。または関係があるべきだ、と信じている。
4. 過剰な賞賛を求める。
5. 特権意識。つまり特別有利な取り計らい、または自分の期待に自動的に従うことを理由無く期待する。
6. 対人関係で相手を不当に利用する、つまり、自分自身の目的を達成するために他人を利用する。
7. 共感の欠如:他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしめない。またはそれに気づこうとしない。
8. しばしば他人に嫉妬する、または他人が自分に嫉妬していると思込む。
9. 尊大で傲慢な行動、または態度。

(DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き より)

社会で活躍する人のなかには、自己愛性パーソナリティー障害的傾向のある人は多々見受けられる。とにかく「自己愛」がキーワードであるが、トランプ大統領の場合、スローガンが「アメリカ第一(America First)」であり、これは彼流の「自己愛」に通じるものがある。最近、東洋経済オンラインが、興味深い記事を報道している[1]。それによれば、ハーバード大学、カリフォルニア大学の教授など、数々の専門家が「ゴールドウォータールール」(心理学者や医師が、自分が直接、診察をせ

ずに公の人物について診断をし、メディアに話してはいけないという不文律)を破って、トランプ大統領が自己愛性パーソナリティ障害ではないかとの声をあげ始めたというのである。

彼が、果たしてそうであるのかどうかの議論はその道の専門家に任せるとしても、多かれ少なかれその傾向があれば、トランプ大統領とのつきあいは大変難しいことを覚悟しなければならないだろう。なぜなら、自己愛性パーソナリティ障害の人に事を納得してもらうためには、正論で義務や道理を説いてもおおかた無駄であり、むしろその人のかかえる不安や嫉妬心、あるいは負けん気などをうまくくみ取ってその気にさせる精神心理学的なアプローチが必要だからである。トランプ大統領とトランプ政権は必ずしも同一ではないので、トランプ政権の内部の人たちもまた同様な問題に直面しているとも言えるかもしれない。

いずれにせよ、政治の現実としてわが国がトランプ大統領とどうつきあうかが問われている。それには、あらゆる可能性を排除せず、従来の国際政治・経済の力学あるいは法理論的アプローチだけでなく、精神心理学的な専門家も交えた複合的戦略シナリオをつくるべきであろう。

## 参考文献

### [1] 東洋経済オンライン

岡本 純子 トランプは世界最強ナルシストかもしれない 何が彼を突き動かしているのか

2017/02/06

<http://www.msn.com/ja-jp/news/world/%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%97%E3%81%AF%E4%B8%96%E7%95%8C%E6%9C%80%E5%BC%B7%E3%83%8A%E3%83%AB%E3%82%B7%E3%82%B9%E3%83%88%E3%81%8B%E3%82%82%E3%81%97%E3%82%8C%E3%81%AA%E3%81%84-%E4%BD%95%E3%81%8C%E5%BD%BC%E3%82%92%E7%AA%81%E3%81%8D%E5%8B%95%E3%81%8B%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%84%E3%82%8B%E3%81%AE%E3%81%8B/ar-AmFZb2>

[最新アクセス 2017年2月21日]